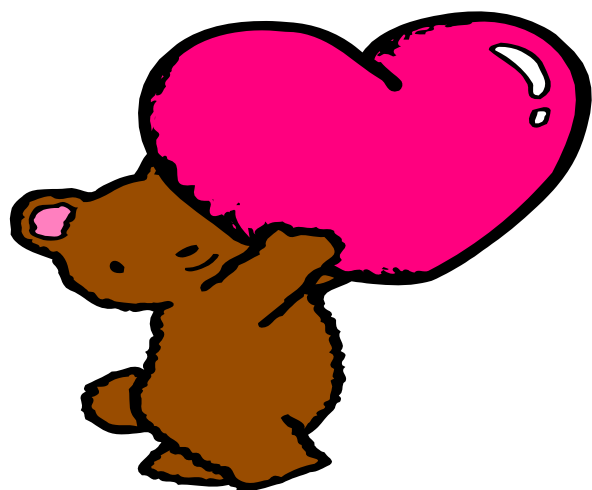


# 第23回 開成町福祉作文コンクール 入賞作文集



平成22年10月

社会福祉法人 開成町社会福祉協議会

☆小学生の部

優秀賞

○開成町社会福祉協議会長賞

わたしと福祉 開成南小学校四年 木野宮 穂萌 … 1

※開成町社会福祉大会朗読作文

○共同募金会開成町支会長賞

ぼくの弟 開成小学校 六年 高橋 将也 … 1

○開成町教育長賞

ふみ子おばあちゃん 開成南小学校五年 小澤 美幸 … 2

※開成町敬老会朗読作文

優良賞

わたしの妹 開成小学校 六年 高橋 未来 … 3

僕のおじいちゃん 開成南小学校六年 落合 智大 … 3

佳作

おばあさんのかいこ 開成南小学校四年 露 木 荘太 … 4

わたしがみんなにできること 開成小学校 四年 遠藤 可菜 … 5

物の工夫や私たちにできること

開成南小学校四年 井上 菜那 … 6

お年寄りの気持ち 開成南小学校六年 長 峯 命輝 … 6

福祉について 開成南小学校三年 工藤 悠樹 … 7

●敬老会朗読作文

点字と向き合うおばあちゃん

開成小学校 六年 飯塚 淑貴 … 8

☆中学生の部

優秀賞

○開成町社会福祉協議会長賞

心のバリアフリー 三年 中谷 美沙 … 9

※開成町敬老会朗読作文

○共同募金会開成町支会長賞

二つのバリアフリー 三年 石川 裕章 … 10

※開成町社会福祉大会朗読作文

○開成町教育長賞

本当の思いやり 三年 中野 優里奈 … 11

優良賞

福祉という名の幸せ 三年 中條 知也 … 12

喜びって 三年 納 侑希 … 14

佳作

「がまん」とは 三年 井上 和優 … 15

実体験を通して介護の大切さ

三年 諸星 美緑 … 16

「福祉とは何か」 三年 遠藤 優 … 17

思いやりの気持を持てる社会に 三年 中野 太陽 … 18

「私と福祉」 三年 田中 萌 … 19

## 優 秀 賞

### 開成町社会福祉協議会長賞

#### わたしと福祉

四年 木野宮 毬萌

わたしにとって、福祉という言葉は、とてもみぢかに感じます。

わたしのお母さんは、わたしが生まれた時から耳がほとんど聞こえません。生活の中でも、お母さんに聞こえるように大きな声で話したり、外に行った時も、お母さんの耳の代わりになったりしています。でも、わたしにとって、それがあたりまえの生活でした。

学校で福祉の勉強をして、わたしは福祉という事にたいして、今まで以上に考える事ができました。わたしは、足も手も動きません。目も見えます。耳も聞こえます。それがあたり前の事だと思っています。もしわたしのお母さんが耳が不自由でなかったら、福祉という事への関心も、あたりまえである事の大切さも感じる事ができなかったと思います。わたしは、足が不自由であるおじいちゃんの車いすをおした時

「ありがとつ」と言われた事があります。よるこんでもらえてうれしかったです。だけど、なんだか悲しかった。元気に歩いていた時のおじいちゃんを知っているから。小さいころいつも一緒に遊んでくれたおじいちゃんを知っているから。

わたしはまだ小学生なので、お年よりの人や身体の不自由な人の力になってあげることや、ささえてあげることが、ほとんどできないかもしれないけど、これからも思いやりの気持ちをわすれないで生活していきたいと思います。

なにもかもあたりまえになっている生活の中で、わたし達だれもがみんな安心してくらしているように、一人一人がおたがいを思いやり、ささえあってくらしているようになることを願っています。

最後に、人は一人では生きていけないとわたしは思います。どんなに体が不自由であっても、年をとっても、人はみんな平等であるという社会をめざして、わたしもがんばっていききたいと思います。わたしのお母さんとおじいちゃんとおしてわたしは、福祉への関心がさらに深まりました。これからも、お母さんとおじいちゃんをささえてあげたいと思います。

☆☆開成町社会福祉大会朗読作文

### 共同募金会開成町支会長賞

#### ぼくの弟

六年 高橋 将也

今年ぼくの弟がぼくと同じ小学校に入学しました。兄弟なら当たり前だけど、ぼくの弟は障害があるので両親に「別の小学校に行くかもしれない」と言われていたから、同じ小学校に入学してうれしく思いました。

ぼくが弟に障害があると知ったのは三年生の時です。父が「弟はお前が通った幼稚園には行かないんだよ。自閉症という脳の機能障害があるから…」と教えてくれました。

ぼくは障害という言葉にとてもびっくりしたし、「弟は元気なのに…」と不思議に思いました。ぼくが知っている「障害」というのは、体が不自由で目が見えなかったり、耳が聞こえなかったり、歩けなかったり…弟とは違ったからです。でもその頃の弟は4才だけどほとんど話さなくて、ぼくをお兄ちゃんと呼ばないし、「おはよう」と声をかけても答えないし、たまにCMのマネや誰かが言った言葉をくり返し

て言っただけでした。例えば弟がうろつろつしているから「何したいの?」と聞いても「何したいの?」と弟は同じ言葉を言うので、何がしたいのかぼくには全然わかりませんでした。

「自閉症といつもの、言葉の遅れや対人関係・社会性の障害、行動や考え方にこだわりがある」と父が教えてくれました。こだわりの苦手なことはその子それぞれ全然違うからその子に合った対応をしてあげることが大事なんだそうです。弟は大きな音や声が苦手で、小さな頃ぼくが怒られたりしていると、関係のないに側でよく泣いています。人が争ったりするのも苦手です。テレビで怒っている人がいたりケンカをしていると「テレビ見ないよ」と消したりします。ぼくが好きなマンガを消されるとくやしくて弟に文句を言ってしまうけれど、目に涙いっぱい顔を見ると弟がすごく恐ろしかったのが分かります。ぼく達が感じるより、もっとずっと恐く感じてしまうみたいです。誰かが泣いているとティッシュを持って来て「はいどうぞ、泣かないでね」と弟はわたしにしてくれます。誰かがケガをするとか「ちょっと待って」とあわててばんそうこうを持ってきてくれます。そんな優しい弟がぼくは好きです。

弟には苦手なことやできないこともありません。

すが、ぼくが助けたいと思えます。そして、今のまま優しい弟でいてほしいです。

### 開成町教育長賞

## 「ふみ子おばあちゃん」

五年 小澤 美幸

ふみ子おばあちゃんは九十二才の私のひいおばあちゃん。おばあちゃんと私は、一緒に住んでいます。

おばあちゃんの背中をマッサージする時は、「ああ、気持ちいいねえ。美幸ちゃん、前よりも上手になったねえ。」

と、言ってくれます。私は誉められるのが大好きなので、嬉しくなってまたやりたくなります。おばあちゃんは誉め上手です。

おばあちゃんは、腰が悪いので杖をつかないと歩けません。それでも、自分の部屋やトイレの床のそうじをしてくれます。雑巾を縫ったり私のゼッケンを付けてくれたりします。だから私達はすごいと思っています。それなのに、お

ばあちゃんはいつも、1つ1つ言います。

「年寄りのになると、何も出来なくて、本当に情けなくて申し訳ないよ。」

私は、自分の事も、私達の事もつづつづつづつづつ、どつして「何もできないし」とか言っつのかなど思っています。家族は、

「そんな事ないよ。自分の事をやるだけです。ごいし、ありがたいよ。」

と、言います。私もそう思います。私はおばあちゃんの事をとても尊敬しているので、ちっとも情けなくないのだから、そんな事言わないで、胸がもやもやしてしまいます。

でもこの間テレビで、九十六才のおじいさんがこう言っていました。

「年寄りになると、皆に迷わくをかけてしまって嫌ですよ。手伝う事も出来ないし。」

全然知らないおじいさんだけれど、話している事が、おばあちゃんと似ていました。お年寄りは皆こう考えているのかもしれない、と思います。私には、お年寄りの気持ちは、はっきりとは分からないけれど、迷わくだなんてちっとも思わないです。

だから私は、お年寄りの人達に、自分が迷わくになつているなどと思わずに、自分はずいと思いが、楽しく生きてほしいなと思いま

す。

そんなお年寄りになってほしいと思っ  
てるおばあちゃんは、最近調子が少し不安定です。  
胸にペースメーカーを入れて生活しています。  
世の中には、こういう人が何人もいるのかなあ  
と思います。

ふみ子おばあちゃん。これからも、がんばっ  
て長生きしてください、応援しています。

☆☆開成町敬老会朗読作文

## 優良賞

### 私の妹

六年 高橋 未来

私の妹は、自閉症です。学校では、開成学級  
に通っています。

だんだん言葉も上手くしゃべれる様になっ  
てきました。私のことを「ねえね」と呼び、お  
母さんのことを「ママ」と呼びます。でも、お  
父さんのことは、「パパ」と言えません。だく  
点が付いている言葉はまだ難しいようです。妹

は、よく自分で朝ご飯を作ります。妹はいつも  
目玉焼きを作っています。お母さんが、お昼ご  
飯や夜ご飯を作ろうとすると必ずお母さんの  
所に行つて、お手伝いをします。妹はいつもお  
母さんのことをよく見ているので、カレーの具  
も全部分かります。味噌汁を作る時にお母さん  
が妹に、「とつとつ取って」と言ったら、妹は冷  
蔵庫からちゃんどとつとつを出します。妹は人の  
言った事を理解出来る様になりました。字も少  
し上手く書ける様になりました。

妹のように自閉症という、しょう書を持つ子  
は、毎日のくり返していろんな事が出来る様  
になるということが、妹を見てよく分かります。  
上手く字が書けなくても、上手くしゃべれなく  
ても、ふつとに妹と遊べるだけでうれしいです。  
妹が出来ないゲームを私がやっている、妹が  
横で見ているいつの間にか覚えてやっていた  
り、私が夏休みの宿題をやっていると、妹も宿  
題を持って来て横でやったりします。妹は人の  
やる事をよく見ているんだなあと感じる時  
があります。人に言葉が伝わらない時は五十音  
表を出して、一文字一文字を指して、伝えたり  
する時もあります。

妹は「すすろ」さんという託児所にいつも行  
っています。そこに、妹より年下の小さい男の

子がいます。妹はいつもその子の所に行つて、  
一緒に遊んであげているそうです。私はその事  
を聞いてすごいなと思いました。最近では、お  
風呂上がりに自分の頭をふける様になりました。  
た。お手伝いが出来て、字が書ける様になつて、  
家族と会話もでき、自分の頭もふける様になり  
ました。お米もとげる様になる。私はすごいと  
思わず感心します。

全ての事がみんなと同じ様に上手に出来な  
いけど、妹は妹なりに、がんばっています。だ  
から私も、妹を助けたいと思います。妹だけ  
なく、世の中にしょう書を持っている人や、体  
の不自由な人がいますが、困っている人がいた  
ら、私は助けたいと思います。

### 僕のおじいちゃん

六年 落合 智大

僕のおじいちゃんは、大正十五年生まれで八  
十四才です。僕は今年で十二才なのでちょうど  
七倍です。若い頃は、少年飛行兵として南の島

へ太平洋戦争に行ったそうです。体ががっちりしていて姿勢が正しく、歩く速さも僕と同じかそれ以上です。しかも、声が大きく怖いので、近づきたくないときもあります。剣道七段の先生で、小学生に剣道を教えています。とても元気なおじいちゃんです。

そんなおじいちゃんですが、耳が遠くて補聴器なしでは、人の声をほとんど聞き取ることができません。年と共にだんだん耳が聞こえなくなっていました。だから一緒に話をしているときも、全然関係ないことを聞いてきたりします。僕は、おじいちゃんの質問に答えるのがだんだん面倒くさくなってきたりします。

この前、旅行用のアイマスクを着けてお兄ちゃんと目隠し鬼をやりました。目隠しをするときも見えないので、最初はお兄ちゃんを全然捕まえることができませんでした。しかし、慣れてきて耳をすますと、お兄ちゃんの気配がだんだん分かるようになってきました。目が見えることが一番ですが、音が聞こえることも大切な役割だと思いました。

そこで、僕は耳栓をして、おじいちゃんの気持ちになってみようと思いました。耳栓をするとき、自分の声や心臓の音が大きくなり、逆に人の声が聞き取りにくくなりました。周りの大き

な音や振動は聞こえましたが、虫の声やテレビの音は聞こえにくくなりました。自分の声の大きさを調節するのが難しくなりました。周りに人がいても、ひとりぼっちになったような気がしました。僕は、なぜおじいちゃんが大きな声なのか、なぜテレビの音量が大きいのか、少し分かってきました。周りの人から声をかけてもらうと少し安心することも分かりました。

となりの部屋から物音がすれば、目には見えなくても誰かがいることが分かります。危険が迫っているとき、まっ先に声をかければ、よけることができます。僕は、生活していく上で、目と同じくらい耳も大切だと思います。だから僕は耳が遠いおじいちゃんの手助けをしてあげたいです。しっかりと顔を見て、大きな声でゆっくりと話しかけてあげることが大切だと思います。



## 佳作

### おばあさんのかごい

四年 露木 荘太

ぼくには、おばあさんがいません。

お母さんの友達のおばあさんの事です。

おばあさんは、病気で足が一步も動かないのでねたきりです。ふだんは、車イスで生活しています。週に五日間デイサービスに通っています。最近は、移動が楽な様に家にスロープをつきました。

でも、お母さんの友達は一入っ子なので介が大変です。だからたまにお母さんや他のお友達がお手伝いに向かいます。

例えば、車イスに移動させたり、髪の毛を切ってあげたり、オムツをかえてあげたりしています。病院では、ぼく達が車イスをおしてあげたり、ストローで飲み物をあげたりしました。おばあさんは、すごく喜んでいました。おばあさんは、あまりしゃべることができないので、顔の表じょうで具合を見えています。泣いたり、笑ったり、とても表じょうゆたかです。

「ほくは、おばあさんやおじいさんがいないけどお母さんは、自分が親のように世話をしています。なぜお母さんがおばあさんの世話をしているかを聞いたら、お母さんは、

「小むらじろにおばあちゃんに小むらじろの面倒を見てもらったからその恩返しだ。」

と言っていました。だから今お世話をしているんだとほくは、思いました。

お母さんが行くとおばあさんは、泣いて来てくれてありがとね。」

と言っていました。その後オムツをかえて車いすに乗せてお母さんとお友達の二人でお風呂場に連れて行き、体や頭を洗いました。

ほくは、三人でやる介护は、大変だと思えます。だからみんな協力してお年よりや体が不自由な人達をみんな助けあって一人でも多くの人が元気になってほしいと思いました。そして身近な人、おばあさんをお母さんや友達が一生けん命介护をしている事がすごくえらくて、すぐきだと思いました。

ほくも体の不自由な人や介护の必要な人がいたらお母さん達の様子にお手伝いをしてあげたいです。これからもおばあさんのお手伝いで自分で出来る事をしていきたいです。

また開成町では、お年よりや子供が多いので、

福祉のサービスマチ施設が多いのもすばらしい事だと思えます。これから福祉がひろくすばらしい開成町になってほしいです。

## わたしがみんなにできること

### 四年 遠藤 可菜

わたしは、二才の時からあわおどりをはじめました。おじいちゃんとおばあちゃんが田中連でやっていたので、練習を見に行く自分からおどりはじめたそうです。

田中連では、毎年五月に高台病院へいもんに行っていきます。わたしは、小学校一年生から行っている今年で四回目になります。

高台病院でどんなことをするかというと、おたんじょうび会のアトラクションとして、車いすの人やねたきりのおじいさんやおばあさんが、ベッドのまま会場に来て、その人たちの前で、あわおどりのパフォーマンスを見せるのです。

一年生の時は、きんちょうしておどりがかた

くておばあちゃんにへすへられた事がありました。

おじいさんやおばあさんたちは、わたしたちのおどりを見ながらスマスママフカス、カスタネットをならしたり、楽器を持っていない人は、いっしょに手の動きをしてくれたり、みんながニコニコ笑って楽しんでくれます。

おどりのさい中に手をのぼしてあく手をもとめてくるおじいさんやおばあさんがいます。わたしの時だけ「何でかな。」と思って家に帰ってきてからお母さんに聞いてみると

「いもんに行った子どもってかなちゃんだけでしょ。病院には、なかなか子ども達が入れないから子どもかなちゃんがかわいかったんじゃないの。」

と言われました。

わたしは、病気を治す事は、できないけれどおじいさんやおばあさんたちをよろこばせる事は、できると思いました。

あわおどりをいっしょにうけんめい練習してもっともっと上手になって、来年もいもんにいったら、今年とはちがうおどりも見せてあげたいです。おじいさんやおばあさんとたくさんあく手をしたり、おはなしをしたりすることが、わたしがみんなにできることだと思います。

## 物の工夫や私たちにできること

四年 井上 菜那

私が今通っている開成南小学校には、とてもたくさんバリアフリーがあります。

たとえば点字。点字や点字ブロックはいろいろな所にあります。点字ブロックは二種類あります。一つ目は「進め」を表しているもの。二つ目は「止まれ」を表しているものです。これを足の感じよく分けている障害のある方はすごいと思います。エレベーターにも点字があり、車いすの方の手がとくようにボタンを低くしている工夫があります。南小は二階建てで、一階にも二階にも「だれでもトイレ」というものがあります。それは車いすの方や目の不自由な方、いろいろな障害を持った方が使いやすいようになっているトイレです。

もし私が障害のある方に出会った時、どのようにすればよいのか考えてみました。目の不自由な方は信号が見えないので、道をわたろうとしていたら手伝ってあげたいと思います。また、私たちがだんだん歩いている道にはたくさんのだん差があります。そのだん差で車いすの方が

こまっていたら、声をかけて後からおしてあげたいと思います。

次に、どのような町にすれば障害のある方も過ごしやすいか、同じように考えてみました。今の信号は昔の鳴らないものが多いので、音声信号がたくさんふえればいいと思います。また、いろいろな場所にだん差があると車いすの方がこまるので、スロープのような道になれば障害のある方にも過ごしやすい町になると思います。

学校、町、今度は家のバリアフリーについて考えてみました。障害のある方が同じ家に住んでいたとしたら、どのようにしたら使いやすく過ごしやすいでしょうか。それは、足が不自由な方は家にエレベーターをつけてあげて、一人でも二階に行けるようにしたり、階段をスロープにしたりするとよいと思います。目の不自由な方は、つえを持っていくことが多いので、物をゆかにおかないようにしたり、角をあまり作らないようにしたりすると住みやすいと思います。

自分の家のことから、できることを少しずつふやしていけるといいなと思います。そして、そんな家がふえていけば、開成町はだれにでも優しい町になるのではないのでしょうか。

## お年寄りの気持ち

六年 長峯 命輝

ほくの、お母さんの働いているお店には、お年寄りのお客さんが多いそうです。そしてほとんどの人が、

「一人だから少しでいいのよね。」

と言って買い物をしていくそうです。そんなお客さんとのやりとりをするたびにお母さんは、「本当に最近一人暮らしのお年寄りが多いのよね。」

ほくは、この夏休み、お父さんもお母さんも仕事で、おねえちゃんも部活や、じゅくでいない時、一人で風ご飯を食べることが何度かありました。誰もいない一人の家。する音はテレビの音だけ。その中でのご飯は、あまりおいしくありませんでした。でもそれは風間のことで夕方になれば、みんなが帰ってきて一緒に、ご飯を食べられます。その日にあったことを、みんなが話すことができます。けれど、一人であるのが夜だったら。それが毎日だったら。と思うと



さびしい気持ちでいっぱいになります。

井細田のおじいちゃんはおばあちゃんが亡くなってから、一人ぼっちでいます。お母さんや、おばさんが週に何回か、風をいって、一緒にご飯を食べたり、話しをしたりして来ています。ぼくも夏休みなどに何回か行きました。前におじいちゃんに、「一人でさびしくない？」と聞いたら、

「なぜか、日曜日の夕方が一番さびしいかな。でも今日は命輝たちがきてくれたからさびしくないよ。」

と言っていました。そういえばお母さんも、お密さんとの会話の中で、

「一日中家にいると誰とも話さなかったりするから今日はこのお店で話しができてよかった。」

と言われてうれしくなったと言っていました。ぼくは、開成町のお年寄り全員を知っているわけではないけれど、もしお年寄りを見かけたら、その人を知っていても知らなくてもあいさつはもちろん、時間があれば、話をしたりしていききたいです。また、開成の人全てがそういうことを、やれる人になれるように心がけていきたいです。

## 福祉について

三年 工藤 悠樹

福祉会館で福祉体験をしました。はじめに点字体験しました。点字を書くために紙をはさみ、一つのますに六つの点を使ったり使わなかったりして字を作ります。「め」は6つの点を使います。「あ」は1つの点を使います。そしてぼくは「あ」から「ん」まで作りました。ぼくの名前も作りました。

次に目をつぶって点字を読もうとしました。でも点字が読めませんでした。目が見えなくても点字が読めるのがすごいと思いました。目が見えない人は指を目のかわりにして字を読んでいるのがすごいと思いました。

開せい駅のきっぷを買った所にも点字がありました。福祉会館で点字をならうまでなんだろうと思っていました。目が見えない人は点字を使ってきっぷを買うのを知りました。駅には目が見えない人のために黄色のてこぼこの線がありました。点字やてこぼこの線があるから、

電車にのれるんだなあと思いました。

次に手話のことを書きます。手話は耳が聞こえない人が使います。指と手を使って言葉にしています。福祉会館で手話の練習をしてから、ビンゴゲームをやりました。手話のゲームをしたり言葉をおぼえたりしました。手話があれば耳が聞こえない人もお話が出来ると思います。手話は耳の聞こえない人の言葉のかわりをしていて思いました。

さらに福祉会館には車いすのことを教える所もありました。車いすは歩けない人が使います。車いすは、だんになっている所は通れませんが、開せい駅の近くの歩道は、車いすが通れるように、だんの所がさかになっていました。足がら上病いんで車いすにのったまま車にのった人を見かけました。

目が見えなかったり、耳が聞こえなかったり、歩けなかったりする人たちも、点字や手話や車いすや歩道のさかがあるから、しょうがいのある人たちも外に出かけることが出来ると思います。

また、おとしよりやこまっている人を見かけたら、話を聞いてもつをもってあげるとか公園がどこにあるのって聞かれたら道をちゃんと教えてあげたりしてつだってあげよう



## 中学生の部

優 秀 賞

開成町社会福祉協議会長賞

### 心のバリアフリー

三年 中谷 美沙

「あれっ、歩けない…?」

私が、右膝に異変を感じたのは、春休み最後の日で、「明日から、中三だ!」というときでした。入学前の新入生ではないけれども、胸の内には、受験に向けての意気込みのような期待もありました。

それは、もう突然に、何の前ぶれもなくやってきました。日に日に痛みが増して、右足に体重をかけることができなくなってしまいました。私は、日頃スポーツもしていませんし、外傷性の原因も思い当たらなかったもので、とりあえず母に連れられて病院へ行きました。

検査の結果、「右膝円板状外側半月板」とい

う診断が下りました。半月板とは、骨と骨を支える軟骨で、私の場合、その半月板が人より大きく厚いために引っかかった状態になり、膝がロックされたように動かなくなっていましたとのことでした。完治するには、手術をして半月板を小さくするしかないと言われ、私は、目の前が真っ暗になりました。

「受験なのに、学校は…」「体育祭や修学旅行もあるのに…」「何で私がこんな目に合わなければいけないの!?!」

我慢できないのは膝だけでなく、それよりもむしろ、悔しさで一杯の心のほうが何倍も痛く、悲しく、つらいものでした。

私は、主治医の先生や家族と話し合い、手術は学校の生活への影響を考え、五月の連休にすることに決めました。そして、それまでの間は、痛みの様子を見ながら、松葉杖で学校に通うことになりました。

生まれて初めての松葉杖の生活が、こんなにも心身共にぐったりと疲れるものとは思いませんでした。学校までの登下校は、家族に車で送迎してもらいましたが、学校の中で生活するというだけでも、大変不便で、体への負担はかなり大きなものでした。例えば、昇降口や教室へ移動するまでの長い階段、下駄箱の段

差、トイレや手洗い場への移動など、今まで普通に出ていたことが何一つ出来なくなり、大きな壁のように私の前に立ちちはだかるのです。体の痛みと疲労、そして、やるせなく、情けない気持ちで沈みがちだった私は、周囲に目を配る余裕などなく、自分のことで精一杯でした。

ところが、そんな私を救ってくれたのは、毎日、一緒にそばで支えてくれ、励ましてくれた先生方や友達でした。私の重い荷物を運んでくれたり、階段や廊下で道を譲ってくれたことは言うまでもなく、以前と変わらず、優しく笑顔で、私を元氣付けて応援してくれたことが何よりうれしかったです。

私は、この病気になった当初は、「自分だけが不幸のどん底」のような思いで一杯でしたが、家族をはじめ、学校の先生方や友達、病院の先生など、周囲の人の優しさや思いやりにふれることで、氷が融けるように心が温かくなるのを感じました。自分は一人ではないと有難く感謝する毎日でした。

そしてもう一つ、今回のことを通じて、私は大切なことを知りました。今まで、私は、ただ漠然と知識として、福祉について考え、体の不自由な方は大変なのだろうなと分かっていたつもりでしたが、突然、自分の足が思うよ

うに動かなくなり、初めて、段差のある場所を歩く苦勞や、雨の日の外出などは危険を伴うものが多いいったことを、実体験として感じる事が出来ました。

幸い、私は、手術、リハビリを終え、ほぼ今までどおり歩行できるまでに回復しました。しかし、自分が治ったから良しではなく、これから、私のように困っている人を見かけたらその人が何をしてほしいのか考え、手助けが出来るようにしたいと思います。

今すぐ、町の施設をバリアフリー化しようとするには、無理があります。しかし、心のバリアフリーは、いつでもどこでもすぐ出来ると思います。私がみんなの優しさや励ましに助けられたように、お互いを思いやる気持ちがあれば良いのです。また、体の不自由な人だけでなく、開成町に住む様々な世代の人が笑顔で暮らせるようになるためには、町の一人一人が自分の周りにはいろいろな人がいて、生活していることを理解しようとする事が大切だと思っています。微力ではありますが、私もそうありたいです。

#### ☆開成町敬老会朗読作文

### 共同募金会開成町支会長賞

## 二つのバリアフリー

三年 石川 裕章

僕は、バリアフリー社会について考えてみました。

そもそも「バリアフリー」とは、もとは建築分野の専門用語で、段差の解消など物理的な障害、つまり「バリア」を取り除くことでした。現在では、さまざまな分野でこの言葉が使われるようになり、物理的なバリアだけではなく、社会的、心理的な全てのバリアを取り除くという意味で使われています。

「バリアフリー」という言葉は、僕の今のまでの生活の中では、あまり考えたこともない言葉でした。そこで、僕の日常とその「バリアフリー」がどのように関係しているのか少し考えてみることにしました。

以前、歩道を車いすで通っていた人が、歩道に自転車があり、通れず困っている姿を見たことがあります。僕は、声をかけるのをためらい、助けることができませんでした。通りがか

った大人の人たちが自転車をどかして通っていました。なぜ手伝うことができなかったのかとその日は反省しました。また駅では、大きな荷物をもったおじいさんとおばあさんが、長い階段を、休みながら少しずつ上がついていく姿を見た事もありました、この時も何も助けてあげられず、心の中で応援しただけでした。

今、バリアフリーを考えると、日常生活で若く健康な人にとっては、気にしない、何気ないことが、障害のある人や高齢者の人にとっては、大きな障害になっていることが多いことに気が付きます。もし、歩道が車いすでも通れるくらい広く、段差もなければ、障害者の人にとって、外出することも、障害のない人と同じかわらないことになるのです。駅の長い階段にしても、エレベーターがあれば、足が弱った高齢者の人にとっても何の苦痛でもなくなるのです。

今は若い僕たちも、必ず年をとり、おじいさん、おばあさんと言われる高齢者になっていきます。また、今は健康な私たちも、いつ、事故やケガや病気により、障害を負って生きていかななくてはならなくなるか、わかりません。高齢や障害というものは、僕たちにとって、決して遠く関係のないことではなく、ごく身近なことなのだと思います。このような自覚をもって

街を見た時、バリアフリーでなければならぬのです。階段のかわりにエレベーター。段差のない歩道。車いすでも利用できるタクシーやバス。手すりの設置などがあればいいのです。出かけた時や生活の中で、不自由なものがなければ、みんなが同じように安心して安全な生活を送ることができるはずなのです。

もう一つ、社会のバリアフリーについて考えてみると、設置の面では整っていても、心の方も方が大事になってくると思います。日本では昔から、何でもみんなと同じだと安心してきたようです。僕も持ち物など「みんな持っているから。」とか、服装もみんなそろえたりすること、気を配ってきたような気がします。自分と周りが同じであることで、自分を守ってきたようなところがあるのです。だから、社会では、いろいろ違いがあることに關しては、受け入れないというか、取りのぞき、分けへだててきたようなところがあるのだと思います。人に對しても、自分や皆と違うことをしている人、障害をもっている人、おじいさん、おばあさんなど高齢の人を、違った視線で見えてしまっていることがあることも、バリアフリーには問題だと思えます。違った面は、それぞれの個性としてお互いに認め合い、協力し合えるようになる

ことが大事なのです。

これから、若い僕たちのかかわる社会もだんだん広がっていくと思います。その中で、設置のバリアフリー、心のバリアフリーを、考えていきたいと思えます。その一歩として、人種や国籍、年齢や性別に關係なく、困っている人を見かけたら、必ず声をかけ、できるだけの手助けをしていきたいと思えます。そして、みんながそろい一歩をふみ出すことにより、バリアをなくし、誰もが暮らしやすい社会になると思っております。

#### ☆☆開成町社会福祉大会朗読作文

#### 開成町教育長賞

### 本当の思いやり

三年 中野 優里奈

先日、私は託児ボランティアに参加しました。その理由は、ただ単純に幼い子が好きだからというものでした。

そして当日、たくさんのお父さんやお母

さんに連れられてやって来ました。お母さんと離れたくなくて泣きじゃくる子、着いたとたん嬉しくてはしゃぎ回る子などさまざまなお子さんがいました。私はどの子と接すればいいのかわからなくて、しばらくその場にじっと立っていました。すると、一人の女の子が人形を片手ににっこりしながら私の前に立っていました。私はすごく嬉しくなりました。なんだか私の方が女の子から元気をもらったような気がしました。私はその女の子と車の乗り物に乗って遊ぶことになりました。女の子が車に乗ろうとすると一人の男の子がやって来ました。どうやら、この男の子も車に乗りたがっているようでした。私はこの二人がけんかを始めてしまうのではないかと不安になりました。幼い子たちはまだ思いやりの心などもっていないのでは、そう思ったからです。しかし、この二人の行動に私はひどく驚かされました。その男の子が女の子が乗っている車を後ろから押し始めたのです。そして一周回って元の位置に戻ってきました。すると当たり前のように乗っていた女の子は降り、代わりに押していた男の子が乗りました。そして、その女の子が押し始めました。その間、二人に会話はありませんでしたが、確かに二人は心が通じ合っていました。私は二人の行動を

見て胸が熱くなるのを感じました。

次に、私はこの女の子とピアノを見に行きました。ちょうど何人かの子どもピアノを見ていました。その時テレビから音楽と一緒に、「みんなで歌って踊ろう」という声が聞こえてきました。私は、みんなと言っても今日初めて会った子同士が手をつないだり一緒に踊るのは無理だろうと思いました。しかし、ピアノを見ていた子たちは一斉に立ち上がり、手をつないで輪になったりして遊び始めたのです。私はまたびっくりさせられてしまいました。驚いている私にボランティアで来ている大人の人が話してくれました。

「小さい子は初対面でも人とふれ合うのが楽しくて自分から輪の中に入っていつちゅう子もいるんだよ。」私が再び見ると、どの子どもみんな笑顔で心から楽しんでいるようでした。その後は何度も何度も同じ事を繰り返して遊んでいました。

私はこの時、自分が小さかった頃のことを思い出しました。私の母はよくリトミックに連れて行ってくれました。そこで私は同世代のふれ合いの中で誰かと一緒に体を動かす楽しさはもちろんの事、片付けをみんなでする楽しさ、友達と遊ぶ楽しさなどをさまざまな事を学びま

した。でもその中で一番感じたのは思いやりだと思います。人とのふれ合いの中で学び、みんなを幸せにすることのできるもの。その思いやりを託児ボランティアの子どものたちの行動を見て改めて感じました。

でも中には、その思いやりで人を幸せにすることが出来ない人もいます。私がよく聞くのはバスや電車の中で席をゆずれない人です。私も声を出すのは勇気がいられます。でも、そうでなく全くゆずる気がないようです。まして座っている人もいます。そういう人は、周りなど関係ない。自分さえ良ければ、という考えをもっているのだと思います。

だから私は、もっと多くの人たちが託児ボランティアにいた子のように人とのふれ合いを大切にして、思いやりをもてるようになってほしいです。いや、実は誰もがもっているのではないのでしょうか。しかし、大人になるにつれその行為に対して恥ずかしいなどの気持ちが入り混じって、上手く表現することが出来なくなってしまうのだと思います。でも、どんな人でも思いやりを誰かに与えたり、与えられたりすればきっと幸せな気持ちになれたり、心がいっぱいになるはずですよ。

けれど、無理して気遣ったり同情するだけで

は思いやりとは言えないと思います。思いやりは自分がやるうと思ってしまうのではなく自然に本能的に誰かのために動くことが本当の思いやりと言えるのではないのでしょうか。私は託児ボランティアを通して人とのつながり、そして本当の思いやりについて考えることができました。

## 優良賞

### 福祉といひ名の幸せ

三年 中條 知也

「福祉」という言葉は頻繁に使われているがそもそも福祉とは何だろう。辞典で調べてみると「人々の幸せ。幸福。」と書いてある。しかし僕たちがよく使う「福祉」とは介護や補助などの意味合いで通っている。似ているようでちょっと違う本当の意味の福祉とは、いったいどういうものなのだろうか。

僕が小学生だった時、神奈川県に盲目の方が

専用の盲導犬と来られて、盲導犬との生活を体験したり、話を聞いたりする企画があったので参加し、初めての福祉体験をしました。その時は盲導犬という犬の存在自体知らなくて、福祉という言葉の意味ですらひどく曖昧でした。

最初に盲導犬との生活を再現して、犬と一緒にアイマスクをして歩き回ったりしました。日頃の生活ではなかなか体験することができない事だったので、緊張感もあれば、違和感もありました。

次に盲導犬を利用されている、目に障がいのある方とお話しをしました。普段の生活の様子や、目が不自由だと何が不便なのかということなど色々話して下さりました。その方がおっしゃった中で一番印象に残ったのは目が不自由だと音や声などの耳で感じることにしかできないので、とても大変ということでした。その時に、僕自身は目も見えて、耳で音や声なども聞きとることができ、体も自由に使えるということの幸せや有り難さを改めて感じることにできました。自分が体験した事はほんのごく一部だったですが、とても怖く大変でした。そしてそのような生活を何十年もしていくと考えるとゾッとしてしまいました。ですから、その企画が終わった後、障がいのある方たちのために

何か貢献できることはないか真剣に考えました。しかし、何かしたくても実現させるのが困難で、結局その大変さを感じることにしかできませんでした。

その体験が終わった後、今度は聴導犬の方の企画にも参加しました。このように貴重な体験をすることで、福祉のことなどについてもっと大切なことが学べるのではないかと考えていました。

内容は盲導犬の時と似たシステムで、生活の体験をした後に聴導犬を利用されている方の話を聞くという流れでした。実際に起きる時に犬が体を叩いてベッドから起こすコミュニケーションを体験しました。目覚まし時計が鳴り響いた瞬間、その音に反応した犬が急いで走ってきてベッドの上の自分を手をつかってバシバシ叩いてきました。目覚まし時計が止まるまで問答無用で腹を叩かれ続けました。体で感じる体験だったので、本当に驚いたし、印象強かったです。

そして、お話しを聞いていて、皆さんの大変さや何の不自由もない自分たちの幸せというもの改めて実感しました。

本格的な福祉体験をしたのはその二つだけでした。充実感もあったし、大変な方々はまだ

たくさんいるということもすっかりと学べました。体に不自由があった人たちは、元気いっぱいに話してくれたら笑顔が絶やさずに応答してくれました。体験をさせてもらうつもりが、逆に勇気を頂きました。

このように、福祉を受けている方は、苦しいけど人一倍元気に活発で前向きな姿勢だったのがとても素晴らしいです。福祉とは体の不自由な方たちを助けたりする事だけではなく、人と人との関わりや皆を前向きに幸せにするような事も立派な福祉なのだと思います。辞典に載っていた福祉とは幸福という意味がありました。その方たちの素晴らしい心と力も僕たちへの福祉活動といってもいいのではないのでしょうか。

こうして僕も中学三年生になり、高校、大学、社会人となっていく中で福祉というものに関わりを持つ時がくると思います。その時は全力でやれることをして、福祉という名の幸せを体の不自由な方、一般の方、自分にとって大切な人に与えられるような人を目指して、明るく未来に向かっていきたいと思えます。

## 三年 納 侑希

私は幼稚園、小学生の頃、毎日祖母の家でご飯を食べ、祖母とたくさん時間を過ごしていた。宿題も勉強も祖母がみてくれた。

しかし、中学生になると部活や塾もあったため兄と二人で留守番するようになり、ほとんど祖母の家へは行かなくなった。でも、おかずのやりとりや、いとこと祖母の家で集まったりする事はそれから何度もあり、学校のことや勉強のこと等、話はたくさんしていた。そんな時、祖母はいつも「ニコニコと嬉しそうに話を聞いてくれる。それでもやはり、毎日顔をみるわけではないので、私はなんとなく祖母とは別々に暮らしているんだな、という気持ちになり、祖母のことを考えることも少なくなっていた。

そんな頃、私が中一の夏、祖母に病気がみつかり手術することになった。平穩だった二軒にとっては大事件だ。祖父はもちろん、母や父もとても心配した。私も、もしも祖母が死んでしまったら……と考えるとすごく心が痛み、もっと一緒にいれば良かったなど、様々な思いをして

いた。それは、きつと口には出さなかったけれど兄も同じ想いだったと思う。手術は無事成功した。私は祖母の病室に入る前にいつも、本当におばあちゃんが病気なのかなー、この病室で治療を受けたりしているのかなーと不思議な感情もあった。なぜなら、私たちの世話をやき、毎日パークゴルフをしていた祖母と病室は、なんだか結びつかなかったから。

お見舞いに行くと、祖母はいつも「嬉しいよ、ありがとねー。」と言う。聞くたびに私は、自分が小さい頃から毎日してもらった事にくらべたらお礼を言われる程、自分は何もしていないと思っていた。同時に今度は私が今までの感謝の気持ちを伝えなきゃー!と思った。しかし、そうは思っても何をしてあげられるのか分からず、とりあえず毎日お見舞いに行く事しか出来ないでいた。

その後祖母は無事に退院した。退院できると知った時、とても嬉しかったしホッとしたのを覚えている。しかし退院した後腰を痛めたり、前々からの持病が悪化したりと、入院する以前にくらべると元気がないように見え、そんな祖母の姿を見て、私はせめて自分のことは自分でして迷惑をかけないようにしようと思っていた。そして、あまり祖母の家へは行かなくなっ

ていった。腰を痛めたりしているのに、私のために無理をさせてはいけない、申し訳ないという気持ちもあった。長い休みになると祖母からは時々電話が来て、「今日もお昼食べに来ないのかい? あんた食べる物あんのけ?」と不満そうに言ってくれたが、体が大変なんだからと思いい、ほとんどお昼を食べに行くことは無くなっていた。

でも今年の夏休みは、ちょっと違った。理由は私の部活が終わったこと。ゆっくりお昼を食べる時間が出来たし、祖母もずいぶん元気になったので、また祖母の家で昼食を食べるようになった。以前にくらべると、祖父が作る事が多くなったけれど、それでも時々私が好きなパスタを作ってくれたりして、私が思っている以上にしっかりとっていることに驚きと嬉しさを感じた。祖母のパスタは本当においしい。全然本格的ではないけれど、大好きな味だ。時々私が祖母に予定を連絡するのを忘れると、必ず電話がある。行けないと伝えると「なによー。そうけ、わかったよ。明日ねー。」ちょっとがっかりしたような声だ。もしかしたらおばあちゃん、私のお昼のお世話楽しんでるのかな? と私はその時思った。

ある日私が父や母と伊豆に旅行に行ったと



きのこと。たっぷり遊んでふと気がつくくと、携帯に留守電が入っていた。「侑ちゃん、お昼に来ないのかー？帰ってきたら、おばあちゃんちに電話を下さい。」祖母からだ。あわててかけ直し「ごめん、連絡するの忘れてた。」と言いつつ、旅行にきていることを伝えると「旅行かー、よかったねー。じゃあおいしいものを買ってきてよね！」と大きな声で笑っている。

おばあちゃん、まだまだお世話になるね。おいしいご飯いつもありがと。冬休みも春休みもお昼をよろしくお願いします。

## 佳作

### 「がまん」は

三年 井上 和優

僕は、ボランティア体験に参加しました。障害者コース、高齢者コース、保育コースの三コースに分かれています。僕がその中で選んだコースは、高齢者コースです。なぜかというところ

僕には、八十三歳の曾祖父と九十三歳になる曾祖母がいて、「少しでも手助けができればいいな。」と思ったからです。

福祉会館には、デイサービスを利用する九十歳を超える高齢者の方が多数来られています。その高齢者の中に車いすを使用されている方がいました。僕は、車いすを押すことになり、少し緊張しましたが、介助士さんから、「デコポコした道は、なるべく通らない」「坂道は後ろ向きで歩く」また、高齢者の耳元で、「ストッパーを解除しますよ。」

「坂道を下りますよ。」  
「前に進みますね。」  
などと、一回一回言葉がけすることを教えてもらい、お互いに安心して行動することができました。おばあさんから、  
「ありがとね。」  
と、言われてうれしかったです。

高齢者の方々は、靴の履き換えや手洗い、食事などの自分でできることは自分の力で行っていました。僕はその時、「何で介助士さんは手助けをしないのかな？手助けしてあげた方が早いのに。」と思って介助士さんに聞いてみると、

「必要以上に手助けをすることは、高齢者の方

にとって自立を損ねることにつながるからだよ。」

と、教えてくれました。僕は、今まで手助けをすることが良いことだと思っていましたが、そうではなく、時には「がまん」をすることも必要なのだということを知りました。そして、介助士さんは高齢者の方の自立を手助けする仕事なのだと感じました。

午後になり、高齢者のみなさんは一生懸命にぬり絵をしていました。その絵は、高齢者とは思えないほど素晴らしいセンスにあふれています。ぼくには到底真似できない色彩です。才能を感じました。そして、僕が年を取った時、何か一つでもがんばれることを見つけないと思わせてくれました。

高齢者の方に、デイサービスについて聞いてみると、

「楽しいよ。」  
「来てよかったなあ。」

などと、笑顔で言っていました。その笑顔を見ると、曾祖母の顔が浮かんで来て、同世代の人と明るくイキイキと過ごせるような場所に一度でも良いから行ってみたいと思いました。

僕が体験した中で一番大変だと感じたこと

は、おしゃべりをすることです。最初は、高齢者の方とどう話して良いか全く分かりませんでした。しかし、介助士のみなさんは違いました。一人一人に大きな声で積極的に元氣よく話しかけたり、相手の目の高さにあわせて会話を弾ませていました。そして、高齢者の方々とても楽しそうに話していました。「やっぱり、介助士さんはすごいな!」と感心させられました。

七月に入り、曾祖父が右足の大腿骨を骨折して手術をすると連絡がありました。手術は無事に成功したのですが、三日間はベッドから一歩も動けなかったそうです。しかし、一週間後にお見舞いに行った時は、補助器具を使って歩けるようにまで回復をしていました。曾祖父は歩きたくなさそうでしたが、良くなるために歩く練習を一生懸命していました。看護師さんも介助士さんと同じように絶えず笑顔で必要以上の手助けをせず、早く歩けるようになるようにと見守ってくれていました。

今回の体験を通して学んだいろいろなことを、今度は曾祖父と曾祖母のために役立てたいと思いました。僕は、「がまん」「こそが」思いやり」なのだと思います。

## 実体験を通して介護の大切さ

三年 諸星 美緑

私はこの夏休み、足の手術のため一ヶ月入院していました。

そして、その実体験を通して介護の大変さを知りました。

同じ部屋には、障害をもっていて何度も手術をし、車椅子生活をしている人と、交通事故で骨折している人の三人がいて、あとは病気で、小さい子が二、三日入院してちょこちょこ入れ替わっていました。

私も初めて車椅子で一週間、そして松葉杖を使って三週間という生活をしました。

病院の設備は、車椅子やベッドが入るエレベーターや、車椅子でトイレに入れたり、お風呂も車椅子のまま入れる、水道も車椅子の高さに合わせてあったりといういろいろ工夫が見られました。

最初の一週間は自分の足が思うように動かない、自分でトイレにも行けない、ベッドから

動けないなど、イライラすることが多い毎日でした。トイレに行く時も歯みがきする時も着替えも、どんな時も看護師さんに助けをもらいました。

とても大変な仕事だと思いました。

「ご飯も手術してすべは、寝たまま食べられるようにおにぎりになっていました。

一番辛くイヤだったのは、手術をしてすべは紙おむつをした事でした。

部屋では、小さい子がすごく泣いたり、自分一人でやりたい事も出来ず、集中できないので、宿題をやりたくてもなかなか進まず、困った事もたくさんありました。ストレスも溜まり、一ヶ月がとても長く感じました。

私は足が治れば普通に歩けるし、運動だって出来る。でも一生、車椅子で不自由な生活をしている人は、たくさん居る。自分ではどうにも進めない所もあり、とても大変だし、精神的にも、辛い事がいっぱいあると思いました。でもいくら身体が不自由でも、自分の出来る事はちゃんとやり、明るく頑張っているなと思いました。

それになかなか歩けなくて、退院出来なくてイライラしている私にも「頑張って…早く退院出来るといいね。」と励ましてくれました。自

分もずっと入院しているのに、優しい言葉をかけてくれて、とてもうれしかったです。私も助け合う気持ちが大切だと思いました。

そしてリハビリになり、私のリハビリは関節可動域訓練、筋力トレーニング、荷重トレーニング、歩行練習などで足のリハビリです。

他のリハビリとしては、手のリハビリ、言語聴覚のリハビリがあるそうです。

理学療法士の先生が一人ついてくれて、指導してくれます。最初は全然曲がる事が出来なかったけれど、一日一日少しずつ曲がるようになってきました。痛いのを我慢してやらないとなかなか動かす事が出来ず、とても疲れます。いろいろな患者さんを見てみると、大人なのに泣きながらやっている人もいたり、リハビリってとても辛いし、甘えているとなかなか進みません。そんなに大変でも先生は患者が楽しくなるような話をしてくれたり、気持ちを楽にしてくれます。

私は一ヶ月間入院生活を送って、自分の行きたい所にも行けず、友達とも会えず、中学校最後の夏休みとしてはつまらなかつたけれど、こんな事がなかったら、身体の不自由な人の気持ちを考えたり、介護について考えたりする事もなかったと思います。

それに私は、中学一年生の頃看護師になりたいて思っていたことがありました。きっと過酷で大変な仕事なんだろうなと思っていましたが、実際の仕事を見る事が出来て良かったです。どんなわがままを言って困らされても、ちゃんと応えてあげる看護師さんはすごいと思います。リハビリをしてくれる理学療法士という職業も知りました。とても興味深い職業だと思いました。人に優しくしたり、助け合ったりと学んだ事がたくさんあったと思います。本当に介護は大変だと思うし、大切だと感じました。

今回体験した事を忘れず、助け合ったり出来ることはやっていきたいと思います。

## 「福祉とは何か」

三年 遠藤 優

私が福祉について考えるきっかけとなったのは小学生の時にやった障害者体験だった。ふだん何の気なしにやっている事がもし目が見えなくなったら、耳がきこえなくなったら足が

不自由になったら突然「障害」となって重くのかかってくるのだ。

アイマスクをして歩くと目の前が暗くてふだんのように歩くことができない。段差につまずいて転びそうにもなった。走るなんて、とてもわくてできない。

耳にイヤホンをつけると周りの音がぼやけていて聞きづらい。いつも聞こえるはずの音が聞こえずあせった。

車いすに乗るとちょっとした段差や坂でも大きな問題だ。人の手を借りなくてはいけない。私にはその時同じ班の友だちがいたけれど、もし自分一人だったら見えず知らずの人に声をかけなくてはならないのだ。

障害によるこういった負担を減らし心地よく暮らしていけるようにと作られたものが「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」だ。階段の横にスロープがあったり、文字の下に点字があったり、車いすにすわった高さで鏡が見られるようにななめに設置されていたりする。公共施設だけではない。シャンプーとリンスの区別がつくようにしているがある。「本当だ。よく見ていたらそうだ。」と思った人も少なくはないと思う。そこが重要なのだ。私たちが普段何気なくやっていることが障害のある人

じつとこの壁なのだ。そこに気づかなければ壁を取りのぞくことはできない。

自分が障害者の身になってみることで初めて分かるようなことがいっぱいあると思う。もっとたくさんの方が障害者体験をしたらユニバーサルデザインの様々なアイデアもできるのではないかな。また、それが実現したら、今よりもずっと住みやすい環境ができると思う。私にだって、いつ何が起るかわからない。目が見えなくなるかもしれないし、耳が聞こえなくなるかもしれない。他人事ではない。今の自分の生活の中では気づかないかもしれないが、意外と身近にあることなのだ。

私はこれから、障害のある人につきあっていくことも多くあると思う。その時に自分の中で壁をつくらずに接していきたいと思う。障害者体験をしたからといってすべてが分かった訳ではない。「ああこんなに大変なんだ」ということが分かっただけで一生つくづくという大変さや覚悟、みんなはできるのに私だけできないというもどかしさをなどを理解することはできない。

しかし、感じていることは同じだ。おかしなものがあれば笑って、悲しいことがあれば泣く。おいしいものがあればおいしいと思う。そんな

所は私たちと何ら変わらないのだ。そう考えると、今まで障害者はこうなんだと決めつけてきたことが実はちがうということに気づく。ただ少しできないことはある。でもそれはまわりの人が補えばよいのだ。「かわいそうだからやってあげようかな」という同情的な気持ちは起こらなくなると思う。

私も、「今私にできること」をこつこつとやると思う。アルミカンのフルトップを集めると車いすを買うお金になるらしい。そういったボランティア活動など、自分の回りにも、自分が気にかけていなかっただけでやれることはたくさんあると思うので、ぜひ参加したいと思う。

今、二十四時間テレビなどを見ていると障害者が出てくる。おどりをおどったり、楽器をひいたり、マラソンに挑戦したりしている。希望を持ってがんばっている姿を見ると私の方が元気づけられることがある。私たちが一方的にボランティア活動するだけではなく、「自分自身も元気になれた。」と思えるようになれば障害者と健常者の間の壁がうすくなり、よりよい社会が築けるのではないだろうか。まず、関心を持ってはじめての一步を踏み出すことが大切だと思う。

## 思いやりの気持ちを持つる社会に

三年 中野 太陽

つい最近まで、ニュースでは少子高齢化社会に日本はなりつつあるという話題が多く放送されていた。高齢者になってくると体も動きづらくなり、移動も大変になる。ほかに、目が見えにくくなったり、耳が遠くなってしまう場合もあるのでさらに生活が大変になってしまう。

そこで今、社会はスーパーマーケットや駅などの公共施設のバリアフリー化を進めている。たとえば駅では、ほとんどの駅でエレベーターを設置したりしている。また手すりやスロープ、字の大きい看板や音声案内機能のついた案内板などがあることにより高齢者の方たちにとっては、少しでも生活のしやすい環境になってきていると思う。このように、すべての人が安全に、便利に生活ができるように設置されているはずのエレベーターや手すりなどが、逆に使いたくても使いにくい、あるいは使えない状

態になってきていると今年の夏休みのある体験で思うようになった。

夏休み某日、友達と出掛けるため電車に乗ろうと手すりにつかまりながら階段を上っていた時、ある物が目についた。それは手すりをつかんでいる僕の手の数10cm先に付いていたガムだった。僕は手前で気が付いたのでよかったが、これが高齢者の方や障害のある方が気が付かずに触れてしまったらどんな気分になるだろう。軽い気持ちで手すりに付けたガムが、本当に手すりが必要な人たちにとれだけ迷惑がかかることになるかを考えると、とてもいけない事だと思いました。また電車内では若い人が空いている席を見つけてさっさと座り、他の駅でお年寄りの人が乗りこんでも席をゆずらない。ひどい時には、立って吊革につかまっているおばあさんの前の席に座っている若い人が携帯電話で通話をしているというところもありました。こんな事をされたらお年寄りの方はとても不快な気分になるし、他のお客さんも迷惑だと思いません。

このように、今は、せっかくすべての人が便利で、安心した生活ができるようにと思って設置した物が、逆に使いづらくなっているという今回の体験で感じました。またこのような若い

人が優先的になっている社会を直すには相手の気持ちを考えるということが一番大切なのだと思えました。手すりにガムを付けた人も軽い気持ちで付けたのかもしれない。しかしそんな人たちも、気軽に付ける前に、もし自分が高齢者になったら、もし自分がガムに触れてしまったらどれだけ不快な気分になるか、そんなことを一人ひとりが考えたならやっぱりガムや「ミミ」をそこに捨てる人は少なくなっていくと思います。電車の席でも同じく、周りへのマナーを守ることが大事だと思えます。僕も時には歩き疲れて、他の駅でお年寄りの方が乗ってきてそのまま座っていたと思うことがあります。これは、この思いはみんな同じだと思えます。人は辛い事より楽な事の方が好きなのでみんな座っていたのだと思いますが、乗ってきたお年寄りの方たちも、やっぱり座りたいと思っているはず。そして前にも書いたように、年をとってくると体が動きづらくなってくるので僕よりもっと疲れていると思うのです。こんなふうに考えて席を譲るとその方はとてもうれしそうに顔を上げて、電車を降りるまで僕に何回も「ありがとう、ありがとう」と言っていました。席を譲ってもらい、相手の方もうれしいと思うだろうし、僕も譲ってあげてよかったという気分になります。このように相手の気持ちを考えれば、結果的に両者ともよい気分になれると思います。

今回の体験で感じたようなことは、これから高齢化社会では大変重要になると思います。自分勝手な行動をする前にもう一度考えてほしいと思います。そうして勝手な行動が少しずつでもなくなっていくってほしいとも思いました。これからの将来、すべての人が安全に、便利に生活できる社会になり、すべての人が思いやりの心を持った社会になってほしいと思います。

## 「私と福祉」

三年 田中 萌

「福祉」という言葉はよく聞くけれど、私は「福祉」についてよく知りません。私にはまだ関係のない事だと思っていたからです。私が「福祉」と聞いて思い浮かぶのは、「お年寄り」



## 第23回 開成町福祉作文コンクール 審査員名簿

### ☆審査員

9月29日（水）の審査会にて、代表作文を審査いただきました。

※順不同 敬称略

所属機関・役職名	審査員名
開成町立開成小学校 校長	小高 達夫
開成町立開成小学校 教諭	小瀬 雪子
開成町立開成南小学校 校長	井上 義文
開成町立開成南小学校 教諭	二見 良枝
開成町立文命中学校 校長	大平 実
開成町立文命中学校 教諭	柳下 直美
開成町教育委員会 充て指導主事	遠藤 悟
開成町老人クラブ連合会 会長	井上 勇
開成町福祉課 課長	遠藤 伸一
開成町社会福祉協議会 常務理事	久保田和男

### ☆特別審査員

川澄 暉

審査会に先立ち、中学校の部 代表作文 10 篇を選出いただきました。

☆この冊子はともしび基金果実助成により作成しました。

- 発行日 平成22年10月
- 発行 社会福祉法人 開成町社会福祉協議会  
〒258-0021  
神奈川県足柄上郡開成町吉田島 1043-1（福祉会館 1 階）  
TEL0465-82-5222 FAX0465-82-5928  
URL : <http://www.kaiseishakyo.jp>  
Email : network@kaiseishakyo.jp



「ともしび運動」はお年寄りも若者も、男性も女性も、障害のある人もない人も、国籍が違っても、すべての人がともに手を取り合って歩むことができる「ともに生きる」福祉社会をめざすことを願って始めました。